

死神

お金に縁がないダウン症の男が、病に伏す母親に言った。

「俺についているのは、貧乏神じゃなくて死神だ」

すると、本物の死神が表れて言った。

「お前に俺の姿が見えるようにしてやる。医者になれ。もし、俺が病人の枕元に座っていたら、そいつはダメ。足元に座っていたら、助かるから呪文を唱えて俺を消せ」

男は、見よう見まねで医者になり、病人の元に向かった。

横たわる病人の枕元に死神がいる。

「ああ、こいつはダメだ……。ご愁傷様です」

そんなある日、大富豪の商人の家で、若い娘が病床にいた。原因不明の難病で、どんな医者も治せなかった。

男が行くと、死神が足元に座っていた。

「足元だ。助かる」

男は、呪文を唱えて、死神を消した。そして、娘の病気は、完治。大金を貰った。

男は、今までの借金をすべて払い、お金を使い果たした。

また、貧乏な生活に戻った男だったが、死神は、いつも枕元。

「これじゃ、金にならない」

そんなある日、お偉いさんの娘の元を訪れると、再び、死神が枕元にいた。そこで、男は、悪知恵を働かせた。

「布団を回して、死神のところに足をもってっちゃえ」

死神がうとうとと寝入ったところを狙って、布団を回して、死神の元に足を持って行った。

「さあ、呪文だ」

男が、呪文を唱えると、死神が消え、娘の病気が治った。

男は、大金を貰ったが、再び、借金の支払いに使わざるを得なかった。

また、怒った死神が表れ、男を洞窟に連れて行った。

「このろうそくは？」

「お前たち、人間の寿命だ」

「これ、消えそうだ」

「そいつは間もなく死ぬ」

「そんなことが分かるんだ」

「これが、お前の母親のろうそくだ」

「消えそうじゃないですか」
「これがお前のだ」
「まだ大丈夫だ」
「俺が吹き消せば、お前は死ぬ」
「…どうぞ。母さんが死ぬなら僕も死ぬ」
「お前面白いな」
「どうして、母さんの枕元に立つんだい？」
「寿命だから仕方ねえ」
「じゃ、こうしたらどうだい」
男は、自分のろうそくを掴み取り、母親のろうそくの上に乗せた。
「何してるんだ、お前！」
「これで、母さんの寿命が延びるんだろう」
死神は、慌ててろうそくを元に戻した。
「こんな事をしやがったのは、お前が初めてだ、死ぬぞ」
「母さんの足元に立ってくれ」
「それはできんが、また眠くなることもあるかもしれん」
男は、洞窟を出て、母親の元に戻り、死神を見た。
「また、枕元か。…死神が寝ている」
男は、以前やったように、布団を回し、呪文を唱え、死神を消し去った。
「母さん、大丈夫かい？」
「ああ、なんだか体が軽い」
「凄い、治ったんだ。あのろうそくどうなったんだろう…」
洞窟の奥、死神が自分のろうそくを折り、母親のろうそくに乗せた。
「これで十分だろう。長生きしやがれ」

了